

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月11日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02205

研究課題名(和文) 20世紀哲学における生命概念と主体性の転換 カンギレム哲学を中心に

研究課題名(英文) Turns in the notions of life and subjectivity in the twentieth century philosophy: around the philosophy of Canguilhem

研究代表者

田中 祐理子 (Tanaka, Yuriko)

京都大学・白眉センター・特定准教授

研究者番号：30346051

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「現代科学史と現代哲学史の接点・起点としてのフランス・エピステモロジー」と、「哲学的「主体性」の動揺と同概念の再検討」に関わる資料収集と分析を行ない、これを基盤として「カンギレム「生命の哲学」の全体像再構築」・「カンギレム哲学のラディカリズムとその反響」の研究を進めた。カンギレムのエピステモロジー研究と次世代への影響関係を精査しつつ、その背景としての20世紀科学研究と社会的受容の関係を探り、現代科学史・生活史・社会史の交錯を辿ることに努めた。その研究報告・議論の場を持ちながら、研究報告としての論文を発表した。さらに次年度以降、全体的な成果をまとめた書籍を刊行する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、20世紀転換期における物理学研究の進展と新知見の科学研究内の・外的な影響を整理し、1920年代から30年代の物理学と化学が哲学的諸概念に与えた動揺を分析した。また、1930年代から40年代の物理学研究活動がこの時期の国際政治的状況から受けた影響を考察するとともに、同時代における生物物理学的研究の視座の萌芽とその展開について整理を行なった。これらの物理学と生物学の交錯の歴史と、40年代の医学史の展開との関係に注目したうえで、並行する時期のカンギレムの哲学的な主要概念の変遷を中心軸としながら、現代的な哲学における人間や主体性概念の根源的な問い直しが生じた史的過程を追跡した。

研究成果の概要(英文)：In this research project I analysed 1)the general nature of french epistemology as a theoretical crossover point between contemporary science and philosophy, 2)cases of oscilation and rebuilding of the philosophical notion of "subjectivity", and upon those analyses I exerted 3)reconstruction of the systhesis of the philosophy of Canguilhem, and 4) re-evaluation of the radicalism of the canguilhemian philosophy and cases of resonance.I examined the characteristics of canguilhemian epistemology and the diverse channels of influence or reinterpretation among philosophers of his next generation.I also examined intersections among changes in science, forms of life, and that of society,around the first half of the twentieth century, as the decisive historical contexts under which the concepts of canguilhemian epistemology had emerged.Of those investigations I published papers and currently writing books, which are to be published in 2019 and folloing years.

研究分野：哲学

キーワード：フランス・エピステモロジー 現代医学史 現代物理学史 カンギレム哲学

1. 研究開始当初の背景

ジョルジュ・カンギレムは、一九四三年の医学博士論文「正常と病理に関するいくつかの問題についての試論」によってフランスの科学認識論(エピステモロジー)の重要な基盤の一つを築いた人物として哲学史上の評価を受けてきた。ただし、この「正常と病理」研究の問題意識は同時代的な環境論・生態論との関係から理解できるものであると同時に、カンギレムが一九三〇年代後半を通じて模索していたと考えられる「生命の哲学」の論理が集約され展開されたものであるとも読める。特に、二〇一一年より刊行の始まったカンギレムの全著作集第一巻(*Écrits philosophiques et politiques 1926-1939 : Œuvres complètes tome 1*, Vrin, 2011)に収められている、この哲学者の若年期の著作からは、恩師たちから受け継いだ方法と、その限界に関する自問の痕跡を読み取ることができる。これによって、この「正常と病理」はただ単にフランス・エピステモロジーの出発点として捉えられるだけでなく、一九三〇年代を通じて、なぜカンギレムによって「生命の哲学」を構想することが必要であったのか、またそのために彼がいかにしてバシュラルの科学哲学の論理と方法を探りいれたのかという点から、読み直されるべき資料であるということが、研究者の間でも新たに共有される課題となっていた。

大戦期間にガストン・バシュラルの科学哲学が登場した意義を再確認することは、カンギレムがバシュラル哲学から何を学ぶことができたのかを見きわめる上で、非常に重要な意義を持つ。それは同時に、二〇世紀初頭にかけての現代科学の急速な動きがもたらした問いに対する、哲学の側の応答を跡づける作業ともなるものと想定された。特に、カンギレムの初期の哲学的履歴、つまりアラン経由の伝統的哲学教育の恩恵という点とフランス・エピステモロジーの問題設定とを結び付けることによって、より大きな哲学的視野を展望させるものとなると考えられたからである。すなわち、カント批判哲学における純粋理性と実践的理性の分別と基礎づけが行われた後の「人間的経験を統一する主体性」の根拠についての問いが、二〇世紀に至ってどのような展開を余儀なくされたのかを、カンギレムの哲学的道程を通じて検討することができると期待された。それは、カント哲学を受容する中で生じた「主体性」をめぐる問いが、科学的合理性を建設していく悟性と、美学的=価値論的判断を遂行する悟性との間に「経験の統一性」という根源的な課題を与えたのではないかという論点を検証する作業となる。この点に関して、カンギレムの孫弟子にあたるグザヴィエ・ロートらの研究が、本研究の重要な先行研究を提供してくれていた。

上記のような視座から、一九三〇年代後半に端を発して、一九七〇年代まで続けられることとなるカンギレムの生命論を読み直し、その論理の全体像を再構成することが重要であると考えられた。それによって、一九三〇年代にカンギレムが経験した哲学史の困難の本質を見極めるとともに、これに対する挑戦的な応答としてカンギレムの諸著作を読み直すことが必要であった。その際には、上記の「正常と病理に関するいくつかの問題についての試論」が重要であるのは勿論であるが、カンギレムの履歴上のメルクマールたるこの著作を挟んで、a. 一九三〇年代末期のデカルト論および技術論(「デカルトと技術」一九三七年、「活動的技術と創造」一九三八年)の論点と、b. 一九六〇年 七〇年代の生命論(「概念と生命」一九六六年、「科学と反科学について」一九七一年、『イデオロギーと合理性 生命科学の歴史における』一九七七年)の議論とを結び直すことが課題と理解できた。前者「a」では、カンギレムが恩師たちから学んだ伝統的哲学では問いきれない問題、そこにおいて断念しなくてはならないと判断された、いくつかの概念の存在を確かめることができると考えられる。そしてそこで提案されることとなった「生命」がどのような役割を担っていたのか、その特性を見極めることで、後者「b」が提起しようとした論理を理解することが必要だと考えられた。

上記の読み直し作業を進めていくことによって、カンギレム哲学の論点を整理した上で、カンギレム自身が受けた教育を通じた、「カンギレム以前」の哲学史の継承および問い直しという側面を持つものであることを明らかにできたならば、次にはカンギレムとその次の世代の哲学者たちの関係性についても、新たな視点を持って捉え直すことができると考えられた。すなわち、カンギレムが彼らと結んだ関係性を、単に彼らの間の繋がりとして見るのではなく、より大きな哲学史の継承・転換として描き直すという試みが、本研究の構想の背景にあった。

2. 研究の目的

本研究は、次の三点を目指すものであった。

二〇世紀における生命科学の発展とその成果が、同時代の哲学における「主体性」概念の問い直しにいかなる影響を与えたかを分析すること。

上記の分析の背景として、19世紀の新カント的人間学が、西欧哲学に対していかなる「主体」論をもたらしていたかを整理すること。

上記の示す二つの思想潮流が集約した事例として、ジョルジュ・カンギレムによる「生命の哲学」の構想を包括的に捉え直す。その上で、彼の哲学構想を西欧哲学の重大な転換点として呈示すること。

カンギレム哲学の論点を整理した上で、これが(カンギレム自身が受けた教育を通じた)カンギレム以前の哲学史の継承および問い直しという側面を持つものであることを明らかにできたならば、次にはカンギレムとその次の世代の哲学者たちの関係性についても、新たな視点を持って捉え直すことができると考えられる。すなわち、カンギレムが彼らと結んだ関係性

を、単に彼らの間の繋がりとして見るのではなく、より大きな哲学史の継承・転換として描き直すという試みが、本研究では目指された。

そのため、本研究ではカンギレム哲学をめぐる哲学史的展開を把握するための指標として、大きく以下の四点の主題に向けて、カンギレム哲学の読み直しと位置づけを進めることを課題とした。

- . [現代科学史と現代哲学史の接点・起点としてのフランス・エピステモロジー]
- . [哲学的「主体性」の動揺と同概念の再検討]
- . [カンギレム「生命の哲学」の全体像再構築]
- . [カンギレム哲学のラディカリズムとその反響]

とを通じて、が成立する土台となった哲学史的背景を確認するとともに、からへと展開された二〇世紀的な哲学史の動向が、広く一九世紀以前からのフランス哲学のいかなる議論と論点を共有するものであるのかを探ることも目指した。そこにおいては、たとえばアルチュセールにおける科学性への意志とその困難は、カンギレムと互いに共有できる課題であるとともに、これに適用される方法論と展望においては、両者は異なる判断を示すこととなったと考えられる。また、ドゥルーズにおける哲学的概念の執拗な再検討と、生物の存在に関する非擬人的視角の探求は、カンギレムの問いの一端を引き継ぐものであると理解できる。かつ、ドゥルーズによる哲学史研究への強い関心、およびニーチェ論の展開については、カンギレム自身による同様の仕事との比較を試みることも意義があると思われる。さらに、フーコーによる一九七八年・八五年のカンギレム論（「フーコーによる序文」・「生命 経験と科学」）は、カンギレムによる「生命の哲学」構想の全体像を捉えるという点においては最大の先行研究となる業績であると言えるが、同時にここでのフーコーによるカンギレム解釈は、フーコー自身の晩年における啓蒙哲学（すなわち近代哲学史の到達点たるカント哲学）への回帰と、彼の講義において繰り返し問われた「主体性」と「真理」の関係性、特にそれらの「成立」や「体制」をめぐる試論がどこを目指していたのかを考える際に、大いに手がかりとなるものであるとも考えられる。

このようにして、本研究においては、カンギレムの「生命の哲学」の論理を「科学史」と「哲学史」の展開を反映した二〇世紀思想史の大きな流れのうちに位置づけ直すとともに、そこに出現した問いの数々がいかにして現代哲学において継承され続けているかを明らかにすることを目指すものであった。

3. 研究の方法

本研究においては、上述した「研究目的」にとして示した要点をそれぞれを実現することを念頭において、基本的に以下の三つの作業を柱として研究活動を進めた。

(a) 現時点において収集が完了している資料についての整理、および同資料による言説の分析を進める。

(b) 関連史資料の補填的収集を行ない、これについてもさらに整理・分析を進める。

(c) 研究報告および論文発表の形で、これらの分析の結果を積極的に公開し、ピア・レビューを受けながら研究を修正、さらに分析を進めていく。

(a)については、研究代表者・田中にとって研究開始時点で最も資料の収集・分析が進んでいない対象であるガストン・バシュラールに関係する資料の収集を進めるとともに、バシュラールとカンギレムのフランス・エピステモロジーの問い直しである「現代科学史と現代哲学史の接点・起点としてのフランス・エピステモロジー」に特に力を注ぐことから実際の研究を進めた。これによって、カンギレムによるバシュラール受容の過程を跡づけるとともに、カンギレムによるバシュラール論の読解を行ない、これを一九三〇年代から五〇年代にかけてのカンギレムによるアラン論と対比するという作業を試みた。研究初年度はそのための資料収集・分析を行なうとともに、申請者の本務先であった京都大学人文科学研究所（当時）が行っている共同研究の場でカンギレム哲学に関する報告を行ない、問題設定と研究方法についての批判的検討を受けるように努めた。それと同時に、「研究開始当初の背景」欄でも言及したグザヴィエ・ロートによるカンギレム初期哲学に関する研究の邦訳を刊行し、これを基盤として日本国内・国外の研究者と本研究課題に関わる諸論点を議論できる場の広い構築を目指して準備作業を進めた。

研究期間の二年目には、上記「研究目的」で示した「」に関する資料収集・分析を基盤として、「」および「」という二つの思想史的な展望を総合して打ち立てることを目指した。そのために必要である資料のさらなる収集・分析を続けるとともに、二〇世紀への転換点を舞台とした哲学史の二本の重要な道筋として、これらの「」および「」の研究成果を呈示できる段階まで、研究を進めるように努めた。またそのために、この二つの主題について、前年度に引き続き、研究会および共同研究の場を借りて、研究報告および論文発表・草稿検討の形で本研究の成果についての検討・批評を多く受けられるように機会を求めた。これに加えて、「研究目的」に記した通りに、「」・「」の二種類の哲学史的コンテクストを背景に置きながらカンギレムの「生命の哲学」を整理する「」の作業を進めた。これについても史資料の追加収集・分析を続けるとともに、試論的な研究発表を行ない、他の研究者からの検討を受けるように努めた。

研究期間の最終年度にあたる三年目には、特に「 」の課題の完成に努めるとともに、「 」の研究も進めて、研究の全体像をまとめ上げていく段階に入るように努めた。この段階においては、主に研究成果の公表につながる草稿の完成に力を注ぐこととし、この過程でできるかぎり研究発表を行ない、草稿の検討に資するものとなるよう試みた。

研究期間を通じて、フランス・パリの高等師範学校に併設されている科学哲学・科学史・科学出版史料センターのジョルジュ・カンギレム文庫でのカンギレム資料研究を行ない、特に「誤謬」の観念と「生命の哲学」の構想の関係を検討した。なお最終的には、本研究計画の研究活動の成果については一冊の書籍としてまとめ、広く一般的にも研究成果を還元できるように刊行することを目指す。

4. 研究成果

本研究では、上記した「研究の目的」に基づき、カンギレムの哲学における、一九世紀フランス哲学界によるカント受容の影響を重要視し、その影響とカンギレムの「生命の哲学」の構想の関連性を考察した。なかでも、「誤謬」という観念を中心としながら、「真理」および「知」の本質についての考察が大きく転換する一九三〇年代のカンギレムの哲学的思索を跡づけることにおいて、バシュラール哲学の発見の時期にカンギレムの思考に作用したと考えられる多様な歴史的背景の要素を検討した。

本研究においては、カンギレムの初期哲学の重要な背景として、科学研究の数理形式上での洗練と、技術的・工学的展開の、両面からの影響によって生活空間および知的伝統に与えられた重大な動揺が持った意味について検討した。バシュラール哲学のフランス哲学史上の特異性、およびこのバシュラール哲学にカンギレムが読みとった歴史的重要性を理解する背景として、本研究は特に、一九二〇代から三〇年代の物理学と化学が哲学的諸概念に与えた動揺を分析した。また、一九三〇年代から四〇年代の物理学研究活動がこの時期の国際政治的状况から受けた影響を考察するとともに、同時代における生物物理学的研究の視座の萌芽とその展開についての整理を行なった。これらの物理学と生物学の交錯の歴史と、四〇年代の医学史の展開との関係に注目したうえで、並行する時期のカンギレムの哲学的な主要概念の変遷を中心軸としながら、現代的な哲学における人間や主体性概念の根源的な問い直しが生じた史的過程を追跡した。

これらの研究の成果については、国内外の学会で報告し、批評を得るとともに、これらの批判的検討を踏まえた上で執筆された論文の形で公表した。さらに包括的な議論としては、今後書籍を執筆し、より広い形で成果を公表することを目指している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

Yuriko Tanaka, Perspectives of the Year 1945 and Turning Points in the History of Science, *Zinbun*, 京都大学人文科学研究所紀要、査読有、49、2019、113-121

田中祐理子、哲学者カンギレムにとっての科学史研究、科学史研究、日本科学史学会会誌、査読無、57(288)、2019、285-294

〔学会発表〕(計 3 件)

Yuriko Tanaka, "A Japanese Representative of the German New Science?: Kitasato the 'Forefront' Bacteriologist and the 'Founding Father of Modern Medicine' in Japan. Society for the Social History of Medicine Conference 2018, University of Liverpool, 2018

田中祐理子、哲学者カンギレムの科学史研究、第 65 回日本科学史学会、2018

田中祐理子、イントロダクション・原爆と医学史の 1945 年をとらえるために、国際ワークショップ・The A-bomb and Medical History/原爆と医学史、2017

〔図書〕(計 2 件)

王寺賢太・立木康介編、田中祐理子他著、68 年 5 月 と私たち 「現代思想と政治」の系譜学、読書人、2019、274

グザヴィエ・ロート著 田中祐理子訳、カンギレムと経験の統一 判断することと行動すること 1929-1936 年、法政大学出版局、2017、408

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 該当なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。